

# 緒 言

内海文化研究施設が研究対象とする瀬戸内海を扱った「“日本最大の海賊”の本拠地：芸予諸島一よみがえる村上海賊“Murakami KAIZOKU”」が、2016年4月に文化庁から「日本遺産」に認定された。よく似たものに「世界（文化）遺産」があるが、これが文化財の保存・継承を目的とするのに対し、「日本遺産」は文化財群の整備・活用をおこない、国内外に情報発信することを通して、地域の活性化をはかるものである。地域の文化財を活用し、観光など地域の経済振興をめざすものであり、そこにはテーマだけでなくストーリー性が求められる。

16世紀後半の戦国後期、キリスト教宣教師のルイス・フロイスが「日本最大の海賊」と呼んだ「村上海賊」は、海上を航行する船舶を襲撃し、金品を略奪するイメージの海賊（パイレーツ、“Pirates”）ではなく、当該期の瀬戸内海において航海の安全を保障し、流通・交易を下支えする存在であった。彼らは14世紀中頃から文献資料に登場し、荘園現地で年貢納入を請け負ったり、帰国した遣明船の護衛を室町幕府から命じられるなど、反社会的な武装集団ではなく中世社会においてそれ相応の役割を担った人々であった。

芸予諸島の因島・能島・来島に本拠をもつ村上三家は同族意識を持ち、伊予国一宮である大山祇神社の神を崇拝するなど共通性を持ちながら、周辺の上級権力に対する帰属性において差異を持ち、それぞれ主体性・自立性をもって行動し、時には互いに敵対することもあった。こうした日本独自の海の領主、中世「海賊」の実態を示す古文書・古記録や、彼らの活動拠点である「海城」を有効活用して地域振興をはかることは、大切なことであろう。

近年、村上三家の中でも最大の勢力を誇った能島村上氏の本拠である能島城で考古学調査がおこなわれ、従来の通説を覆す発見が相次いだ。たとえば、これまで能島城に居住性はなく、詰めの城もしくは出城的な場所として捉えられていたが、発掘調査により多くの建物跡や生活容器が出土したことにより、単なる要塞ではなく人々の生活の場であり、武家儀礼や饗応など非日常的な空間としての性格も見えてきた。今後、芸予諸島各地の「海城」の発掘調査により、文字資料だけではわからなかった中世「海賊」の性格や行動についての分析が進むことが期待される。

また、大三島の大山祇神社は多くの甲冑の所蔵で知られるが、それだけでなく、実は大量の連歌が奉納されている。戦国時代の武将が戦の前に連歌会を開催して家中の結束を固めたことはよく知られているが、来島村上氏など、海賊村上氏もしばしば連歌興行をおこない、多くの家臣が参加していた様子が見えてくる。毛利氏が、織田信長の攻撃を受けて籠城中の大坂本願寺に兵糧補給を敢行し、織田方の水軍を破った天正4年（1576）7月の第1次木津川口の合戦がよく知られているが、村上三家は毛利水軍・小早川水軍・宇喜多水軍とともに（まさに連合艦隊として）参戦している。そしてその直前に開催、奉納された連歌が大山祇神社に残されている。したがって、「海賊」の文化性についてもまだ検討の余地があると言えよう。

このように、瀬戸内海における中世「海賊」については、文献史学だけでなく考古学や日本文学も加えた、まさに学際的な研究が求められているのである。

2018年3月

広島大学大学院文学研究科附属内海文化研究施設  
施設長 本 多 博 之



# 目 次

## 緒 言

天明期の夏季天候と瀬戸内海地域……………中山 富 広…… 1

日南市収蔵飯田医院旧蔵和漢古書分類目録……………妹 尾 好 信…… 15

本文の翻刻と  
書入注の整理 九条本『文選』卷十六（上）……………陳 獅…… (31)

林原美術館蔵『射山百首和歌』翻刻

一守覚・慈円・静空……………北 原 沙友里…… (17)

山口県文書館蔵「近藤芳樹日記」翻刻（十三）……………久保田 啓 一…… (1)

（ ）は縦組で裏表紙から

広島大学大学院文学研究科附属内海文化研究施設研究紀要投稿・執筆要項

広島大学大学院文学研究科附属内海文化研究施設細則

広島大学大学院文学研究科附属内海文化研究施設運営委員および研究員（平成29年度）